

第47号議案

「第2回平和を願う文京戦争展・漫画展」の後援名義の使用について（継続審議）

上記の議案を提出する。

令和2年7月8日

提 出 者 文京区教育委員会

教育長 加藤 裕一

別記様式第1号 (第6条関係)

文京区教育委員会 共催・(後援) 名義使用申請書

2020年 5月 7日

文京区教育委員会 殿

申請者 (申請団体) 日中友好協会文京支部

住所 (所在地) 文京区本駒込 5-15-12

代表者名 (ふりがな) こ たけ ひろ こ
小竹 弘子

代表者連絡先 (事務担当者) 03-3828-2949

下記事業を実施するに当たり、文京区教育委員会 共催・後援名義を使用したく、申請します。

記

事業名	2回平和を願う文京戦争展・漫画展 一 村瀬守保軍写真 一 漫画家の橋本ひさし証言漫画		
共催又は後援名義等の使用を必要とする理由	小中高高校生をはじめ、教える教師も保護者も戦争を知らない世代になっており、人口の多さを誇っている。空襲や原爆などの被害とばかりに日本が中国アジアを侵略した加害の事実を伝える事は重要です。戦争を知らない若い世代が見て話し合う機会にするために教育委員会の後援は欠かせません。		
実施期間	2020年 8月 10日(月) から 年 8月 12日(水) まで (3日間)		
実施場所	文京ビックセンター アートサロン		
事業内容	目的	別紙「目的」	
	内容	村瀬守保氏の戦場写真、著名な漫画家の橋本ひさし証言漫画、元兵士の証言DVD上映、記念講演 ちばてつや氏(交渉中)	
	対象者	区内小中学校の児童・生徒、保護者、教員、高校生、参加予定人員(大学生、区民他)	
	参加費	入場無料	
他団体の共催、後援等(申請中、承認済の別)	日中友好協会東京都連合会、文京区若幼組合後援会、文京区若幼組合後援会、新婦人文京支部、東京保健生活同組合 他団体、個人に呼びかける		
備考			
申請書類一式は、教育委員会会議資料として、HP等で公開いたします。 公開することに (同意する) ・ 同意しない			

※ 「目的」は、教育委員会が後援するに当たり、「区立幼・小・中の児童・生徒にとって、どのようなメリットがあるのか」という視点で記載してください。

事業名

第2回平和を願う文京戦争展・漫画展

—村瀬守保写真展（文京区真砂町生まれの兵士が撮った日中戦争）

—漫画家の満州引揚げ証言—

事業内容

内容 村瀬守保氏の写真展、漫画展（もう10年すれば—漫画家たちの証言）

証言・DVD上映 ちばてつや氏講演（要請中）

対象者

区内小中学校の児童・生徒・保護者・教員、高校・大学生、区民他

他団体の共催、後援等

日中友好協会東京都連合会、文京区労働組合協議会、他労働組合、新婦人文京支部
東京保健生活協同組合、文京9条の会連絡会他団体・個人に働きかける

目的

昨年実施した「平和を願う文京戦争展」は、1500人を超す方々が来場されましたが、若い世代（10～30才）は10%にすぎませんでした。来場者のアンケートでも「戦争を知らない若い世代に見てもらいたい」との声が寄せられています。

展示を見た中学生は、日中戦争の実態をきちんと受止める感想（事業実績①）を寄せています。小・中・高校生をはじめ、教える教師・保護者達も戦争を知らない世代になっており、人口の多数を占めています。

1931年から45年までの日中戦争、太平洋戦争について歴史の事実を語り伝えることは、重要になっています。国内での空襲や原爆等の被害と共に、その原因となった日本の侵略戦争の加害の実態を、歴史の事実として伝えることが大事です。

その点からも、2年半（1937-40年）召集され、従軍する中で撮影をした村瀬守保氏の写真は、戦争の実態・真実を克明に伝えるものです。それは見られた方々の感想②にも現れています。

今年はさらに、ちばてつや氏や赤塚不二夫氏ら著名な漫画家が、幼少期満州からの引揚げ体験を描いた漫画を展示し、そこでも戦争が女性や子どもなどの弱者を犠牲にしたことを伝えています。

これらを見て戦争や平和について考え話し合う機会にしたいと思います。

特に若い世代に見てもらうためにも、教育委員会の後援をぜひともいただきたいと思っています。

「平和を願う文京戦争展」 実施要綱

1、事業の目的

(案第3)

展示する写真 50 枚は、文京区真砂町生まれの村瀬守保氏が撮ったものです。村瀬氏は戦場写真家ではなく、1937 年（昭和 12 年）輜重兵として召集され、中国大陸を 2 年半に渡って転戦、愛用のカメラを持ち、自分の所属する中隊全員の写真を撮ることで、非公式の写真班として認められ、3,000 枚の戦場写真を撮影した人です。

村瀬氏の写真が広く国民に注目されたきっかけは、2012 年村瀬氏の遺族が、遺品の写真約 1,000 枚分の保存と活用を、日中友好協会に依頼したことから始まります。

日中友好協会は日本兵たちの「人間的な日常」とこの兵士達が犯した南京事件（南京虐殺）（参考資料①）、「慰安所」（参考資料②）日常的な加害行為などを、克明に記録した写真を通して、村瀬氏が伝えようとした「戦場の狂気が人間を野獣に変えてしまう」というメッセージを重んじて 50 枚の写真展示パネルに、作製しました。

この 50 枚の写真展示パネルを展示し、戦争の日常と異常、高揚と陰鬱の対比が写し出されているのを見て、多くの人に「戦争とは」を考えてもらうこと、話し合ってもらうことを目的にしています。

また、日本が中国を侵略し戦火を広げ、更にアジア・太平洋戦争に拡大した結果、東京大空襲・沖縄の地上戦や広島・長崎の原爆被害へと拡大し、2,000 万人に及ぶ中国・アジアの人達の犠牲、310 万人の日本人の犠牲を生みました。戦争の実態は色々な面にわたっています。

今年は、さらに終戦で満州等から引上げて来られた著名な漫画家の証言漫画を展示し、より多くの方に平和や戦争について考える機会にしたいと思います。

2、事業の計画

村瀬守保氏の写真展、漫画展 “もう 10 年もすれば一漫画家たちの証言”

証言 DVD の上映

講演 漫画家 ちばてつや氏(交渉中)

日中友好協会文京支部

連絡先 小竹紘子

Tel・FAX 03-3828-2949

私たちの見解

今回の「第 2 回平和を願う文京戦争展・漫画展」に展示する写真は、文京区出身の村瀬守保氏が、1937 年召集を受け、1940 年 1 月召集解除になるまでの 2 年半、中国国内を転戦するなかで撮影し続け、戦場での生活、日本軍の侵略の実態を克明に伝えています。

写真の説明であるキャプションは、村瀬氏自身が発行された写真集「私の従軍中国戦線」から作られたものです。

私たちは、著作権を持つ日中友好協会本部と協議しました、関係者が集まり「著作権に触れること」等で大論議になりました。

論議の末、日本軍の侵略・加害の実態や戦争被害等を知らない若い世代に見てもらうためには、「後援」をもらえる条件を重視しようという結論になりました。

NO.33 の「南京の大虐殺で云々」の“大” 覆い伏せることにしました。

日中友好協会文京支部
支部長 小竹 絃子

事業予算書

事業名 和国平和を願う戦争展・漫画展

団体名 日中友好協会 文京支部

収 入 単位：円		支 出 単位：円	
賛同する団体・個人 の寄付	260,000	会場費	46,500-
		パネル借用料	30,000
		” 送料	5,000
		プロジェクト借用料	5,500
		宣伝費(チラシ等)	70,000
		資料等印刷費	10,000
		講演料	50,000
		予備費	33,000
		会費	10,000
計	260,000	計	260,000-

2020年 5月7日

(備考)

日中友好協会文京支部 会則

(名称、事務所、連絡先)

第1条 本会は「日中友好協会文京支部」と称し、事務所は文京区本郷 2-18-8-401 植上方、Tel 03-3818-7258

(目的)

第2条 文京区民と中国国民の友好関係の拡大に努め、必要な友好事業を行うことにより、国際交流活動の啓発に寄与することを目的にする

(活動内容)

第3条 前条の目的を達成するために、つぎの事業を行う

- ① 日本と中国の文化交流と友好拡大にかんすること
- ② 両国の歴史・文化・芸術など学習を強め、交流促進に関すること
- ③ 在日中国人・留学生との交流連携に関すること
- ④ その他目的の遂行に関すること

(会員の資格)

第4条 第2条の目的に賛同する

(役員)

第5条 本会の役員は次の通りとする

支部長 1 名、事務局長 1 名、会計 1 名、会計監査 1 名

(役員を選出方法)

第6条 役員は総会において選挙で選出する

(役員任期)

第7条 役員任期は 1 年とする、ただし再任は妨げない

(総会・役員)

第8条 1.本支部の会議は、総会・役員会とする

2.総会は支部の最高決議機関で年 1 回開催 会員の過半数の出席で成立、出席者の過半数の賛成で決定する

イ事業計画 ロ予算・決算 ハ規約改正 ニその他の必要事項

3.役員会は月 1 回開催する

(経費)

第9条 本会の経費は会費、その他の収入によって賄う

(会計年度)

第10条 会計年度は毎年 4 月 1 日～翌年の 3 月 31 日とする

(会則の発効)

第11条 本会則は 2012 年 4 月 16 日より発行する

会 員 名 簿

団体名

No.	役職	氏名	住所（在勤・在学者は下段に名称と所在地を記入）	電話番号
1	支部長	小竹 紘子		
2	事務局長	植上 一夫		
3	会計	高畑 久子		
4	会計監査	古田 泰人		
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				
16				
17				
18				
19				
20				

※用紙が足りない場合はコピーをしてください。

【注意】

- ・実際に活動している全ての会員についてご記入ください。
- ・活動していない人の名前を記載すること、区外会員の記載を省略すること等の不正が認められた場合、登録を取り消すことがあります。
- ・在勤、在学者については住所欄の下段に勤務先や学校の名称と所在地をご記入ください。
- ・必要事項が全て記載されていれば、既存の名簿をご提出していただいても結構です。

事業実績

2019年8月8日（木）～10日（土）シビックセンターアートサロンで「平和を願う文京戦争展」村瀬守保氏写真展と文京の空襲写真を展示し、証言DVDの上映及び語り部の話を行いました。

	参加者	アンケート（感想あり）	
8月 8日（木）	400人超	131人	（104人）
8月 9日（金）	500人超	200人	（150人）
8月 10日（土）	600人超	96人	（85人）
合計	1500人超	427人	339人

3日間を通して1,500人超の方が来場し、427人の方がアンケートに答えています。10日にアンケートが少ないのは、午後語り部の話を聞く会が行われ、100人以上の人が参加され用紙が不足したことと、立錐の余地がない状態になり記入スペースがなかったことが影響したと思われます。

見た方の91%が村瀬氏の写真に関心を持ち、「戦争の実相が良く分かった」と答えています。

また、元日本兵が中国での加害体験を語った証言DVDにも35%が関心を示しています。

アンケートの80%の方が感想や意見をよせています。その中から中学・高校生・大学生、若い世代、通りがかり（20%）でたまたま見学した方を中心に感想をリストアップして資料にしました。（次ページから5枚）

1) 中・高校生の感想から ①～③中学生

- ① 中国各地を第一線部隊の後を追って転戦した村瀬さんの写真は、日本兵の人間的な日常を克明に記録しており、戦争の実相をリアルに伝える他に、例を見ない貴重な写真となっている。一方では南京虐殺、「慰安所」などけっして否定することのできない侵略の事実が映し出されている。

パネルには沢山の写真とともに村瀬さんの気持ちや状況の解説があったことでとてもリアルに村瀬さんが見た戦争が伝わってきました。

普通にどこにでもいる日本人が戦争に行かされていたのだということが、伝わってきて本当にショックで戦争の怖さを感じました。村瀬さんの言葉に「一人一人の兵士を見るとみんな普通の人間であり、家庭では良きパパであり良き夫であるのです。戦場の狂気が人間を野獣に変えてしまうのです。このような戦争を再び許してはなりません」とあります。まさにその通りだと思いました。

村瀬さんの写真を見て、なぜ人と人が殺し合わなければならないのか。鉄砲や刀を持たない老人、女性、子どもまで虐殺されていった戦争の悲惨な現実が見え、決して戦争というものを許してはならないと思いました。

悲惨な歴史を風化させることなく、しっかりと語り継いでいくことで戦争をもう二度としてはいけないという思いが強くなると思います。今はあたりまえだと思っている平和な世の中を、これからも平和で有り続けさせるために、私たちにできることは歴史を正しく知り、受止めて伝えていくことだと考えました。

- ② なんでも武力で解決しようとした日本はもう少し他の解決策があったのではないかと思った。日中戦争のことについては、あまりくわしく知りませんが、罪のない人、子どもや老人が沢山殺されてしまったという事実を知り、このようなことは二度と起こしてはいけないと思いました。
- ③ 罪のない人が大勢巻き込まれる戦争が、もう二度と起こらないようになってほしいと思う。村瀬が残してくれた写真で当時の状況を知ることが出来ました。日本の戦争の仕方や武力で解決しようとする姿勢に納得がいかなかった。
- ④ 高校生は「教科書の資料では全然足りないと思いました。

2) 一般来場者の感想から (400超のアンケートから若い世代・

通りがかりの人を中心にまとめました)

① 大学生 (チラシ)

貴重な写真、証拠が確かに残っているのに、慰安婦はいなかった、南京大虐殺はなかったと発言する人の気が知れません。

大学生 (新聞)

戦争の実態の写真を見て、戦争の残酷な現実を知った。

20代 (通りがかり)

とても心に響きました。貴重な写真、映像の展示、ありがとうございます。

20代 (知人)

写真:それぞれに付いている解説が、特定に思想によらず、客観的であり、ありのままの当時の空気を感じることが出来ました。

20代 (通りがかり)

今も昔も同じ日本人であるのに、非人道的な行動を「当たり前、仕方ない」と感じてしまうような状態になっていたと思うと、とても恐ろしい。繰り返してはいけないと強く感じた。日本人の加害の歴史を隠すことは、戦争のおそろしさを隠すことであり、歴史を繰り返すことにつながりそうで恐ろしい。

② 30代 (チラシ)

正月のごちそうを楽しみにする兵士の写真等、普通の人間らしい一面が見える一方で、慰安所の写真や川に打ち上げられた人間の写真など、言葉では表現できないむごい写真もあり、戦争というのは、本当に人間性を破壊する行為なのだということがよくわかった。

30代 (通りがかり)

吐気を催す戦争の記憶を多くの人々に伝えたいと語り続けて下さった証言記録は大変貴重なものです。出来るだけ多くの戦争の歴史の事実を、終戦記念の時期だけでなく、平和で学び、反省し続けるための努力が必要だと痛く感じました。広島原爆ドームや沖縄の平和祈念会館だけでなく、日本の首都にも語り継ぐための施設は必ず必要だと思えます。

30代（通りがかり）

通りすがりですが、戦争展で戦争の悲惨な事実を知り胸がつまりました。沢山の方に見てもらって、絶対に戦争はいけないという事を感じてもらいたいです。

30代（通りがかり）

ふらっと立ち寄った展示会でしたが、写真という全てを物語る戦争の様子はとても考えさせられるものがありました。今後もこういった広報活動が必要と思いました。

30代（新聞）

ことばでは言いあらわせないすさまじさを感じました。貴重な機会をありがとうございました。

③ 40代（知人）

貴重な資料写真だと思います。今はいろいろと妨害もあると思いますが、機会をとらえて定期的に同じような展示をしていただければと思います。

40代（チラシ）

戦争の本当の姿がよくわかりました。現実にあったことをゆがめることなく、伝えていくことは大切だと思います。

40代（区役所へ用事で）

もっと若い人が見てくれると良いなと思いました。戦争を知らない、その悲惨さを知らない世代が、もし今戦争がおき、日本がまきこまれたら戦地へ行くことになるはず。本当にそんな世の中に耐えられるのか、若い人程考えるべきだと思う。今の若者にとり、戦争ははるか昔の事、遠くでしかない事としかとらえられていない気がする。もし自分が・・・、そう思って想像し考えるべきだし、こうした写真を見ることですこしでも戦争の残酷さを知って欲しい。

40代（知人）

慰安所の看板の写真を初めて見ました。南京の虐殺の写真も多くの日本人が見て置く必要があります。村瀬さんの写真を多くの人に見てもらおう事。

40代（新聞）

侵略戦争をきちんと勉強していなくてあいまいだったことに初めて気付いた。もっと勉強しなければと思った。DVDはそのきっかけとしての導入としてわかりやすく見ることができて良かった。国内でも強制連行された人が殺されていたのは知らなかった。軍隊の中のホモソーシャルが、現代にもつうじるものがあると思った。

40代（新聞）

当時の写真は戦争そのものを真つすぐに語ります。言葉では伝わらない時もストレートに皆に伝わるのではないか。

40代（新聞）

真実の写真を見て、おどろきました。話や資料の文章は見たが、写真はみてなかった。なぜ一般に、TVや新聞などには見せられていないのでしょうか。今の平和は、過去のあやまちを伝えていない、ほとんどの人が知らないのではないか。

40代（通りがかり）

貴重な戦争体験談を聞いて考えさせられました。当時の写真は悲惨で・
・日本人はもっと自国の犯した戦争という事実、向き合わなくては
いけないんじゃないかと思いました。

④ 50代（通りがかり）

実際の写真が生々しく、人間のやることではない、二度とあってはならないですね。

50代（新聞）

平和な現在からは想像も難しい。目を覆いたくなるような事実の写真にありがたい思い。平和をかみしめて生きます。

⑤ 60代（区役所にきて）

平和のありがたさに感謝し、侵略戦争を起こしてはいけないことを次の世代に伝えていかなければならないと思いました。

60代（通りがかり）

同様な元兵士の方々の番組を見たことはありましたが、改めて生々しく、戦争の悲惨さを感じました。

60代（チラシ）

戦中にもかかわらず、鮮明な写真で状況が良くわかりました。命がけで写真を撮られたのではないかと感じます。戦争は人間を変えてしまいます。このような戦争は絶対に起こしてはいけません。

⑥ 70代（通りがかり）

事実、記録は重要。戦争被害者は日中事変では中国、一方太平洋戦争では、日本人は米国より民間施設、家屋の空襲にあった。中国人だけでなく、日本国民も大きな犠牲を払った。戦争程残虐なものはない。過去の歴史を反省し、平和指向に向くべく努力すべき。

① 南京事件(南京虐殺)

日中戦争さなかの1937年12月13日の南京陥落から始まる日本軍の南京虐殺事件については、その規模や被害者数に諸説はあるものの、大規模な虐殺があったことは、史実として確定した疑いのない事実です。当時知らされなかった日本国民は、戦後の東京裁判における被害者・加害者の証言で、この日本軍の行為を詳細に知ることになって衝撃を受けます。周知のとおり、その責任をとって、松井石根陸軍大将が死刑判決を受け処刑されています。

そして、2005年4月の日中外相会談で当時の町村外務大臣が提案し、2006年の安倍首相訪中の際の日中首脳会談で合意され、同年から2009年にかけて行われた「日中歴史共同研究」の日本側報告書は、南京虐殺事件について次のように記述しています。(この報告書は外務省のホームページに掲載されています。)

「日中歴史共同研究」の日本側報告書

4) 南京攻略と南京虐殺事件

<中略>

「中支那方面軍は、上海戦以来の不軍紀行為の頻発から、南京陥落後における城内侵入部隊を想定して、『軍紀風紀を特に厳粛にし』という厳格な規制策(『南京攻略要綱』)を通達していた。しかし、日本軍による捕虜、敗残兵、便衣兵、及び一部の市民に対して集団的、個別的な虐殺事件発生し、強姦、略奪や放火も頻発した。日本軍による虐殺行為の犠牲者数は、極東国際軍事裁判における判決では、20万人以上(松井司令官に対する判決文では、10万人以上)、1947年の南京戦犯裁判軍事法廷では30万人以上とされ、中国の見解は後者の判決に依拠している。一方、日本側の研究では20万人を上限として、4万人、2万人など様々な推計がなされている。このように犠牲者数に諸説がある背景には、『虐殺』(不法殺害)の定義対象とする地域・期間、埋葬記録、人口統計など資料に対する検証の相違が存在している。」

<中略>

この報告書にあるように、日中間で虐殺数については見解の違いがあるものの南京で集団的、個別的な虐殺事件が発生したことは、日中両政府の合意のもとで行われた歴史共同研究において明確に結論が出されています。

この立場からの共通認識に立って貴教育委員会が結論を下されるよう要請するものです。

② 慰安所

日本軍「従軍慰安婦」の存在も、強制性の態様については、諸事例あるものの、日本軍の関与の下に多数の女性の名誉と尊厳を深く傷つけたとして、元「従軍慰安婦」に心からのお詫びと反省の気持ちを表明した1993年の「慰安婦関係調査結果発表に関する河野内閣官房長官談話」を歴代内閣が踏襲しているように、日本軍が管理する「従軍慰安婦」制度の存在は否定し得ないところです。これを「中立・公平」性に欠けるという理由をもちだして目を背けることは許されません。

なによりも、本件展示は、南京虐殺後の現場を映した写真や、トラックで移送される「慰安婦」たちを撮影した、貴重な写真群です。

事実から目を背けてはならない事を訴えるものとして貴重なものだと考えます。

2014年3月24日記者会見で、菅官房長は河野談話見直し「あり得ない」と述べています。

菅義偉官房長官は24日午前の記者会見で、従軍慰安婦問題をめぐり旧日本軍の関与と強制性を認めた1993年の河野洋平官房長官（当時）の談話について「検証はするが、見直しに及ぶことはあり得ない」と語った。

自民党の萩生田光一総裁特別補佐が23日に談話の検証を受け、新たな政治談話を検討すべきだとの考えを示したことへの発言。

菅官房長官は「河野談話の見直しはしない、と安倍晋三首相が国会で明言している。首相と安倍内閣の思いは首相の国会答弁に尽きる」と述べた。

慰安婦関係調査結果発表に関する河野内閣官房長官談話

1993年8月4日

いわゆる従軍慰安婦問題については、政府は、一昨年12月より、調査を進めて来たが、今般その結果がまとまったので発表することとした。

今次調査の結果、長期に、かつ広範な地域にわたって慰安所が設置され、数多くの慰安婦が存在したことが認められた。慰安所は、当時の軍当局の要請により設営されたものであり、慰安所の設置、管理及び慰安婦の移送については、旧日本軍が直接あるいは間接にこれに関与した。

慰安婦の募集については、軍の要請を受けた業者が主としてこれに当たったが、その場合も、甘言、強圧による等、本人たちの意思に反して集められた事例が数多くあり、更に、官憲等が直接これに加担したこともあったことが明らかになった。また、慰安所における生活は、強制的な状況の

下での痛ましいものであった。

なお、戦地に移送された慰安婦の出身地については、日本を別とすれば、朝鮮半島が大きな比重を占めていたが、当時の朝鮮半島は我が国の統治下であり、その募集、移送、管理等も、甘言、強圧による等、総じて本人たちの意思に反して行われた。

いずれにしても、本件は、当時の軍の関与の下に、多数の女性の名誉と尊厳を深く傷つけた問題である。政府は、この機会に、改めて、その出身地のいかに問わず、いわゆる従軍慰安婦として数多の苦痛を経験され、心身にわたり癒しがたい傷を負われたすべての方々に対し心からお詫びと反省の気持ちを申し上げます。また、そのような気持ちを我が国としてどのように表すかということについては、有識者のご意見なども徴しつつ、今後とも真剣に検討すべきものとする。

われわれはこのような歴史の真実を回避することなく、むしろこれを歴史の教訓として直視していきたい。われわれは、歴史研究、歴史教育を通じて、このような問題を永く記憶にとどめ、同じ過ちを決して繰り返さないという固い決意を改めて表明する。

なお、本問題については、本邦において訴訟が提起されており、また、国際的にも関心が寄せられており、政府としても、今後とも、民間の研究を含め、十分に関心を払って参りたい。

(外務省ホームページから)

3)

一日本兵が撮った日中戦争

一村瀬守保写真パネル・全50枚目録一



【主な年表と村瀬守保さん略歴】

1909年(明治42年)12月

文京区真砂町に生まれる

1927年(昭和2年)7月

私立豊山中学校諭旨退学

以後 人夫、新聞配達員、商店員、テキヤ、
船乗り、トラック運転手、タクシー運転手

1931年(昭和6年)9月 柳条湖事件(満州事変)

1932年(昭和7年)1月 第1次上海事変

1937年(昭和12年)7月 盧溝橋事件

召集 輜重兵 補充兵 二等兵

同年8月 第2次上海事変

同年12月 南京事件

1939年(昭和14年)8月 ノモンハン事件

1940年(昭和15年)1月

召集解除

同年3月

会社員・(株)三田鉄工所 工場長、社長

1943年(昭和18年)1月

再召集で入隊するも健康上の理由で除隊

1945年(昭和20年)8月 敗戦

(株)三田発動機、(株)パン、アルプスミシン(株)、
アルプス産業(株)社長

その後

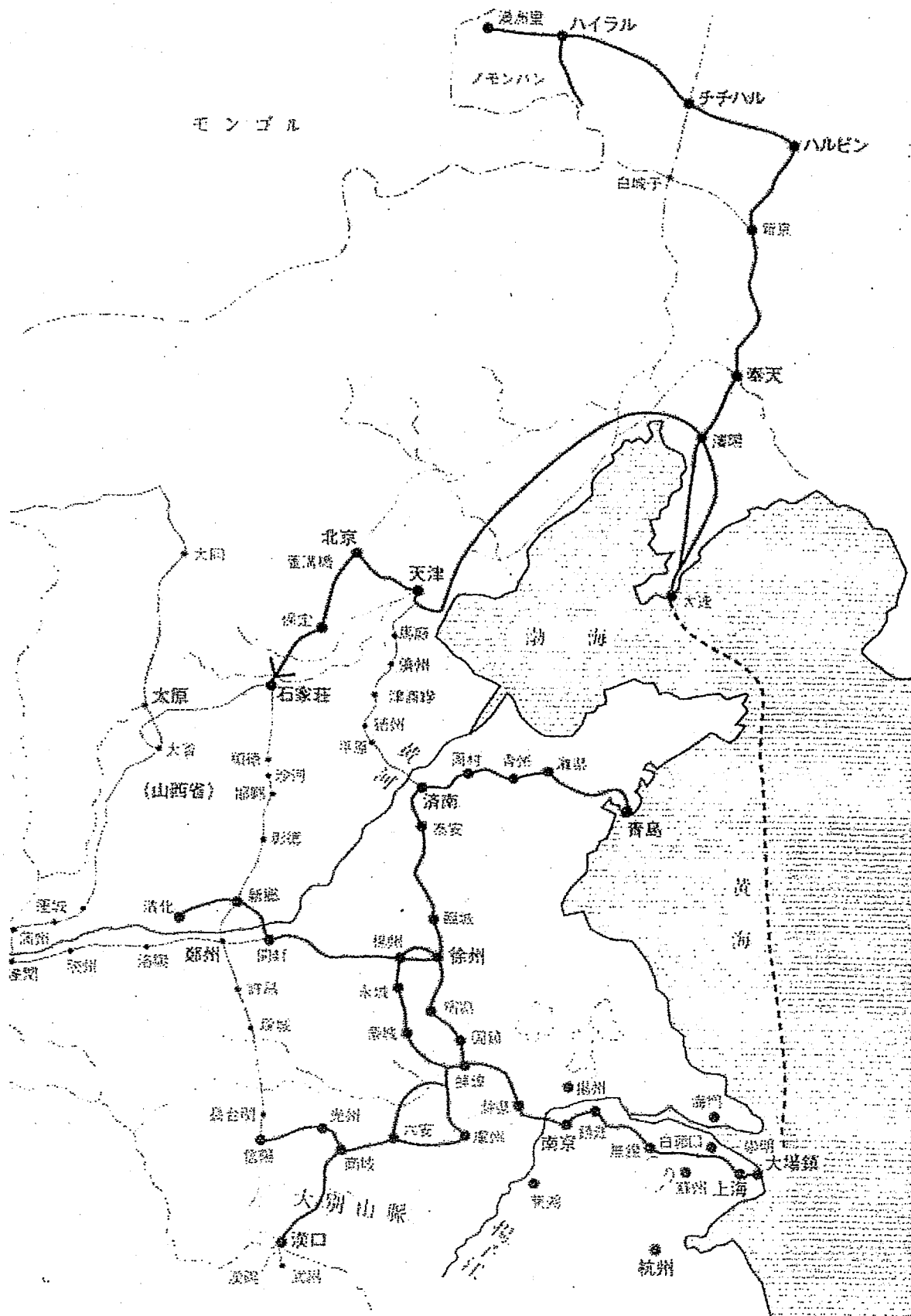
埼玉設備工業(株) 社長

全国商工団体連合会 常任理事

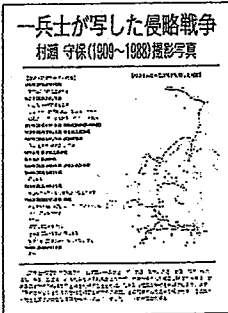
埼玉県商工団体連合会 副会長など歴任

1988年(昭和63年)7月 死去 78歳

【村瀬さんの所属部隊が転戦した経路】



2



NO. 1 一兵士が写した侵略戦争

1937年(昭和12年)に召集され、日本軍の一兵士として、天津、北京、大連、上海、南京、徐州、漢口、青島、山西省、ハルビンなどを転戦するなかで、村瀬守保さんが撮影し続けた写真は、日本軍兵士たちの戦場での生活を記録するとともに、日本軍の侵略の実態を克明に伝えています。「平和を守ることが次の世代に対する私たちの責務」との村瀬さんの遺志を受け継ぎ、ご遺族から贈呈を受けた貴重な写真を展示パネルにしました。 日本中国友好協会



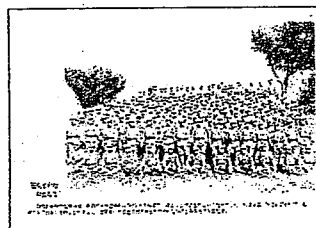
NO. 2 はじめに

私は13人兄弟の6男として、1909年(明治42年)12月に東京都文京区本郷で生まれました。1937年(昭和12年)7月、28歳の時に召集を受けて、中国大陸を2年半にわたって転戦し、さまざまな体験をして参りました。当時、私は戦争反対の意見をもっておりましたが、その事を他人に洩らすことはできませんでした。中国ではカメラ2台を持参して、中隊全員の写真を撮っていたので、中隊の非公式の写真班として認められ、約3000枚の写真を撮ることができたのです。現地ではシャッターをおすとき、できるだけ平穏な気持ちで、人間らしい態度を失わないよう心がけました。



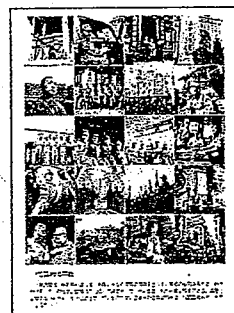
NO. 3 愛用のカメラ

15歳の時にカメラ「パーレット」を入手してから、60年以上も写し続けてきましたが、ただ夢中でシャッターを押すだけでしたから、腕前のほうはサッパリです。召集された時、できるだけ、かさばらないカメラをと「ベビーパール ヘキサー4.5」を買って、胸のポケットに入れて出征しました。いつでも、どこでも、5秒もあればシャッターを押せるのです。上海に転戦した時、外人租界は無傷で、カメラショップもありましたから、二眼レフ1台と現像、焼き付け用品一式を買い入れました。



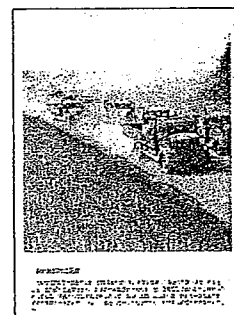
NO. 4 召集された将兵たち

兵站自動車第十七中隊は、中隊長・井上中尉以下200名の編成で、ほとんど召集された将兵だけでした。私は第二小隊に配属されて、田中少尉の当番兵を命じられました。行軍演習が富士の板妻哨舎で行われた時の全員集合の写真です。



NO. 5 約3000枚の写真

行軍の間に、中隊長をはじめ、中隊じゅうの兵隊の写真をとって、軍務の合間をみては、焼き付けをして、内地のご家族の方へ送って頂きました。そのため、私が写真を撮ることは、軍務に支障のないかぎり、半ば公認となっていたのです。2年半の従軍期間中に、約3000枚も写したでしょうか。



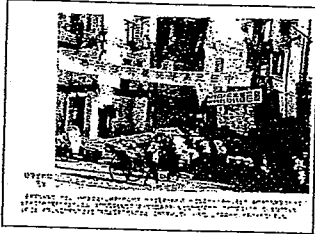
NO. 6 自動車部隊に配属

入営は1937年7月31日でした。部隊編成がすんで、車両を受領し、各自の所属が決められると、富士山麓方面へ2週間ばかり、部隊の行軍演習が行われました。8月18日に品川駅から宇品へ向かって出発。宇品からは貨物船に乗り込んで、釜山へ上陸。釜山からは、鉄道で一路北上です。初めて異国の土を踏んで、いよいよ敵地に向かったわけですが、別に何の感慨もありませんでした。



NO.7 飢えた子どもたち

列車が国境線を越えて「満州」に入ると、物売りの母が、わずかばかりの果物を売りに来ました。兵隊たちにだまし取られないようにと尻込みしながらの商売です。現地の子どもたちは、日本兵が捨てた残飯を拾い集め、がつがつとむさぼり食べています。



NO.8 破壊された天津

日本軍の爆撃で、めばしい建物はほとんど破壊された天津。所々に死体も転がり、夜になると人っ子一人通らず、崩れ果てた廃屋のかげに日本軍の歩哨の銃剣がきらめくのと、人間の死体をむさぼり食って毛並みの良くなった野犬の群れが、我が物顔にうろついているだけでした。街中には、爆撃した日本軍の手による「中国と日本の兄弟国は互いに共存共栄していくべきだ」とのスローガンが掲げられていました。



NO.9 舟を引く苦力

北京郊外の揚柳鎮。道路沿いの運河も、貨物や人間の、有力な輸送路になっています。下りは貨物を積んで自力で、帆を使って運航し、上りは空荷で苦力（クーリー・下層労働者）に引かせて運航していました。



NO.10 北京郊外の盧溝橋

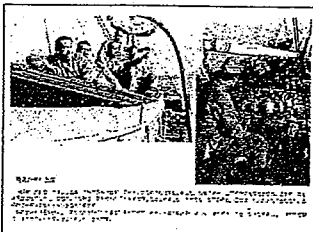
1937年7月7日、たった一発の銃弾が盧溝橋事件を引き起し、やがて8年間にわたる日中戦争にまで拡大しました。日本軍の守備隊にたいして、現地の中国兵が襲ってきたのが事件の発端と言われていますが、当時現地の日本軍の中からも「日本軍が仕掛けたんだ」という声が聞こえていました。10月、中隊は天津を出発して北京郊外の豊台の兵舎に移動。豊台へ移ってから数日後には、盧溝橋を通して南進し、保定、正定、石家荘にまで進出しました。保定城外の小高い丘の上に立って、井上中隊長が敵情を偵察しています。



NO.11 怪しいと見れば

盧溝橋事件から約3か月後、北京から南進する途中の瑤璃河畔で怪しい住民を発見した臨時軍需品収集班の岩切中佐は、通訳に命じて厳重に取り調べを行っています。

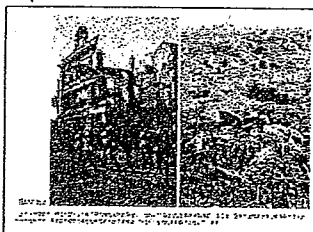
駅の警備地には「中国人は立ち入るべからず。立ち入れれば銃殺にする」という日本軍の張り紙があります。



NO.12 見えたぞ！上海

1937年11月19日、大連から上海への転進命令が出て、7千トン級の輸送船に乗船しました。船倉のずーっと下の方の船底にまで詰め込まれ、高さ4尺位に仕切られた、蚕棚のような所に、畳1枚当たり1人ずつ押し込まれました。それでも、お天気の良い日には、気のあった兵士たちが、上甲板で一杯飲みながらお国自慢の交換です。

船内生活が3日間続くと、屋ごころから海の色がまるで違ってきて、黄色くドロドロと濁りはじめ、波がずっと小さくなって来ました。やがて左右に、ほのぼのと岸が見えはじめました。上海です。



NO.13 死闘のあと

上海・大場鎮で、守りが堅かった中国軍の陣地を攻め落とし、市内の警備に当たる海軍陸戦隊員。ここは、日本の上海派遣軍と中国軍の激戦が行われた所です。

日本軍の猛攻に敗れた中国軍兵士の遺体は、野にさらされたまま白骨と化しています。



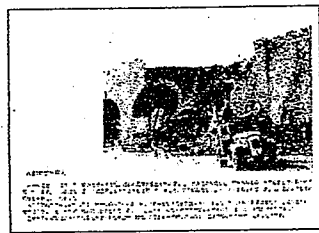
NO.14 老婆の訴え

ある部落で昼食の大休止の時、逃げ遅れた老人と子供が、恐怖におののきながら部屋の奥に身をかくしているのが、見つかりました。子供にキャラメルをやろうとしましたが、手を出そうともしません。涙ながらに語る老婆の訴えを聞くと、80歳にもなる老婆がつかまって、2人の日本兵に犯され、けがをしたというのです。言うべき言葉もありませんでした。



NO.15 若者の運命は

不敵な面魂の若者が、中国の便衣隊のスパイだ、と捕えられ憲兵隊に送られました。おそらくこの若者が生きてかえることはなかったでしょう。



NO.16 首都南京へ突入

第一線に近づくにつれて、部落を通過するたびに虐殺死体が目立ち始めました。民家に踏み込むと、下半身裸の婦人が下腹部を切り裂かれて死んでいます。少し奥には、5～6歳の子どもがうつ伏せに死んでいました。奥の部屋にもう2人、老人が殺されていました。このような虐殺死体は随所に見られました。

南京の攻略が大幅に遅れたので、第一線部隊の兵隊は、厳しい命令を受けて目が血走っていました。私たち輸送部隊はなぜか、2週間ばかり、城内に入ることを許されず、城外に足止めされていました。どこからともなく城内で大虐殺が行われている、という噂が流れてきました。

日本軍の砲爆撃によって突破口をあけられた中山門の城壁。ここから十六師団の将兵が、怒濤の如く南京市内へ突入したのです。



NO.17 河岸いっぱい

ようやく足止めが解除されて、ある日、荷物受領に揚子江岸の、下関埠頭へ行きました。ずーっと、広い河岸がいっぱいに死体で埋まっているのです。岸辺の泥に埋まって、幅十メートル位はあるか、と思われる死体の山でした。死体に油をかけて、焼こうとしたため、黒焦げになった死体も、数多くありました。



NO.18 平服の民間人が

虐殺されたのち薪を積んで油をかけられて焼かれた死体。軍服を着た者はほとんどなく、大部分が平服の民間人で、婦人や子どもも混じっているようでした。



NO.19 おびただしい死体

揚子江岸には、おびただしい死体が埋められていました。虐殺したあと、河岸へ運んだのでしょうか、それとも河岸へ連行してから虐殺したのでしょうか。



NO.20 死臭の中を

死臭で息もつけない中を、工兵隊が死体に鉤を引っ掛けて、沖へ流す作業をしていました。1回に数体ぐらいですから、こんなやり方では2カ月以上もかかりそうでした。



NO.21 駐屯地の生活

南京陥落後、郊外の滁県で駐屯中は、春のような日和が続きました。駐屯地では毎日食べること、洗濯、兵器の手入れ、内地への手紙が仕事で、2か月ばかりのんびりと暮らしました。

駐屯地に、待ちに待った内地からの郵便小包が到着しました。急いで分けけて渡さなくてはなりません。



NO.22 待ち伏せ攻撃

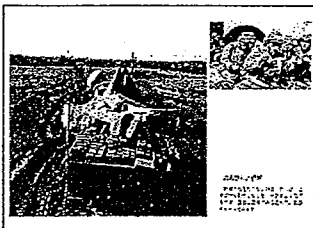
1938年2月、徐州作戦のため、わが第十七連隊にも北上命令が下りました。第一線部隊の十三師団直属です。徐州戦は平地での戦いで、随所で待ち伏せた敵と遭遇します。ある日、徐州付近の部落を通過中、いきなり左右の民家から一斉射撃を受けました。恐怖だけが先立ち、夢中で脱出することしか考えられませんでした。

車列中程のトラックが前輪を道わきの戦車壕に落とし、後続の十数輦が取り残されました。その後に集中攻撃を受け、散会して応戦、ようやく脱出はしたものの、十数名が死傷または行方不明となりました。



NO.23 敵襲から脱出して

敵襲からようやく脱出し、小高い丘に上がって敵情を偵察する隊員たち。



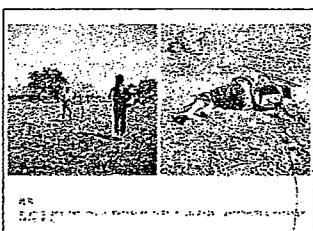
NO.24 のんびりと行軍

敵襲のおそれのない時は、のんびりと洗濯物を乾かしながら、鼻歌まじりに行軍です。昼食は道端に座り込んで、飯盒飯をかつ込みます。



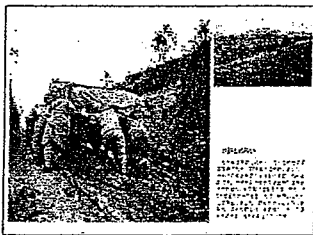
NO.25 第一線の兵士たち 試し斬り

駐屯した付近の部落に怪しい若者がいると引き立ててきましたが、翌朝、日本刀の試し斬りで惨殺されていました。左は、首を斬られながら、夜中に這って逃げ出し、50メートルほど離れたところで絶命した若者。



NO.26 銃殺

近くを歩いている物売りの年寄りが怪しいと、部隊の裏手へ連行した兵隊がいましたが、直後にズドンと一発の銃声が聞こえ、行ってみると老人が倒れていました。



NO. 27 悪路との闘い

徐州戦は失敗に終わり、さらに奥地の漢口攻略のため、部隊は西に移動しました。洪水の影響と大雨で道はものすごいぬかるみです。車輛が泥にはまると自力では脱出できません。結局頼りになるのは人力で、30人ほどでロープを引いたり、後押ししたりして脱出しました。服もズボンも全身泥まみれ、濡れた服を着たまま寝て、あくる日もそのまま、ぬかるみとの闘いです。



NO. 28 果てしない持久戦

日本軍は漢口作戦に30万の兵力を投入しましたが、中国側の抵抗はすさまじく、日本側の死傷者も2万2千人を超え、果てしない持久戦に陥りました。

ある日、食糧徴発に出かけた兵隊が、夜になっても1人帰ってきません。翌朝、搜索隊が付近の部落を搜索しましたが見つからず、結局、このあたりでやられたんだろうと思われる部落を焼き払い、逃げ出す住民を銃殺してきた、というのが帰って来た搜索隊の報告でした。



NO. 29 戦場でお正月

お正月は、お酒も甘味品もたっぷり配給があります。一杯飲んで内地へ帰った気分で、お国自慢の盆踊りに興じる兵隊たち。お正月くらいはきれいにしようぜ、と頭を刈りあう兵隊たち。ドラム缶でも、お正月の朝風呂となると、また格別です。



NO. 30 大日本軍保護村

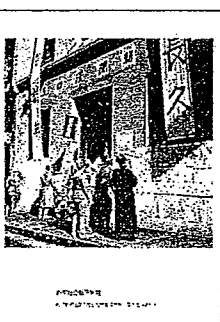
漢口を制圧し、治安が回復してくると、住民の保護は占領軍の任務です。みだりに物資を徴発したり、住民に危害を加えたりしないよう制札が立てられます。

どこへ行っても子どもたちは屈託がありません。残飯をもらったら、すぐ食べられるように茶碗と箸を用意しているちゃっかり者もいます。



NO. 31 検問所

市内の治安は日一日と平静に保たれてきました。要所要所には検問所が設けられ、身分証明書を提示させ、厳重に検査しています。



NO. 32 新聞社の戦況発表

報知新聞社漢口支社前で戦況発表に見入る将兵たち。



NO. 33 捕虜の使役

漢口の街ではたくさんの捕虜が使われていました。南京の大虐殺で世界中の非難を浴びた日本軍は、漢口では軍紀を厳重に保とうとして、捕虜の取り扱いには特に気をつけているようでした。捕虜の出身地はいろいろです。四川省、安徽省などほとんど全国から集められているようで、なかには広西省の学生も含まれていました。貴州の山奥に年老いた母と妻子を残してきたという男に、私はタバコを1箱やりました。

覆って伏せることにします。



NO.34 物乞い

戦争で一番大きな被害を受けるのは、社会の底辺の人、とくに身体障害者ではないでしょうか。光を失った人が生きる道は、物乞い以外にどんな方法があるのでしょうか。



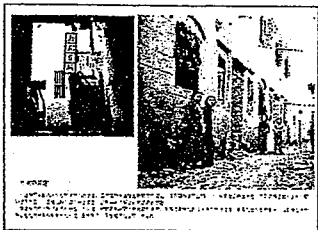
NO.35 軍直営の「慰安所」

南京戦では、日本軍の兵士たちによって数万の女性が強姦され、なかには12歳の少女まで輪姦されたという報告があります。兵士のセックス問題を解決する必要に迫られた軍司令部は、軍直営の慰安所と称する売春宿設置を決定しました。それにより日本軍の軍紀を保とうと考えたのです。慰安所の前で兵士たちは、そろそろ俺の番が来るぞと胸をときめかせて待ちました。第六慰安所「桜楼」には池田龍兵衛司令官名の「登楼者心得」が貼り出され、「サックは必ず使用し後は洗浄すべし」などの注意書きがありました。



NO.36 前線への移動

兵士たちの相手をさせられた「慰安婦」と言われる女性のほとんどは朝鮮人女性で、だまされて連れてこられたか、あるいは強制的に連行されたと言われます。戦局が進むにつれて、多くは屋根のないトラックで荷物同様に前線に運ばれていました。



NO.37 慰安所規定

兵站軍司令部の定めた慰安所の規定は、①慰安所外出証を所持すること、②入場券は下士官、兵、軍属は2円とする、③入場券に指定された部屋に入ること、④但し時間は30分とする、⑤用済みの際は直ちに退去する。

軍直営の慰安所にあきたらない兵隊は、裏町の私設慰安所を訪れます。不潔に満ちたあばら家の路地には、戦争で生きる術を失った女性たちが子どもたちや家族を養うために、日本軍の兵隊を相手にしていました。



NO.38 慰問団が来た

兵士たちの最大の楽しみは、日本からの慰問団です。有名歌手が来ると聞くと、100キロも離れた山奥から押しかけて、立錫の余地もありません。



NO.39 こんな奥地まで

徐州のこんな奥地まで、「大日本国防婦人会」のたすきをかけた在留邦人が湯茶のサービスに出てきてくれています。



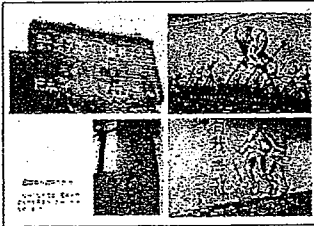
NO.40 道路が崩れて

道路が崩れて横倒しになった車は、荷物を下ろしてみんなで引き起こします。



NO.41 日本軍への抵抗

華北の大きな町にはどこにでも、抗日壁画が描かれていました。日本軍の残虐行為に怒りを込めて、国民の奮起を促したものです。遙か南の広西学生軍の壁画が目立ちました。



NO.42 日本兵への呼びかけ

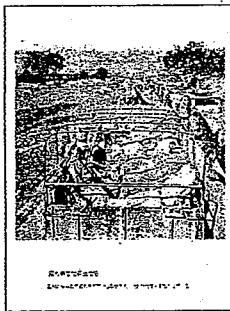
壁画のなかには、日本語で書かれた日本兵への呼びかけもありました。



NO.43 物資の配給

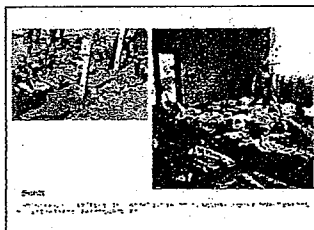
難民に物資の配給をする少年兵たち。国家総動員という蒋介石の命令で、国のために駆り出されたのでしょうか。

共産軍の宣伝攻撃に対して、日本軍も物資の配給という融和政策を取ることになりました。わずかな配給をもらうために、長い行列をして順番を待つ住民たち。



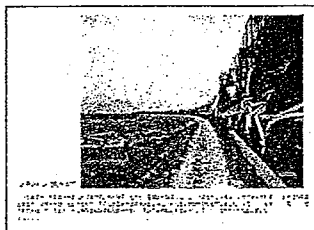
NO.44 疲れ果てた兵士たち

毎日の強行軍で疲れ果てている兵士たち。ただひたすら眠るだけでした。



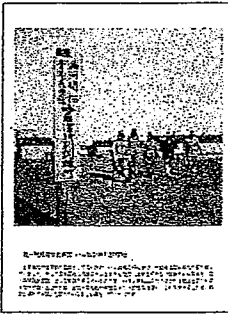
NO.45 野戦病院

現地の兵たん病院。ベットはありませんが、それでも戦地の病院としては良い方でした。戦地で負傷した兵士たちは、野戦病院で治療を受けたうえ、治って原隊復帰するか、重傷者は内地送還になります。



NO.46 ノモンハンに向かって

1939年7月、外蒙古兵十数名が「満州国」側へ侵入したのを、日本兵が撃退した、ということからノモンハンでの衝突が始まり、8月に外蒙古と同盟のソ連軍が大攻勢をかけてきて、そのため日本軍は陸軍創設以来といわれる悲惨な大敗北を喫しました（ノモンハン事件）。ノモンハンでの戦闘が続いているとき、十七中隊にも急遽転進命令があり、満鉄の貨物輸送車に乗ってノモンハンに向かって北上しました。



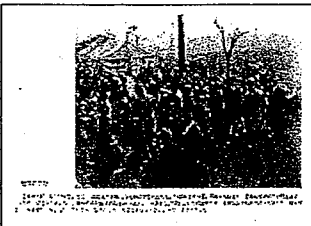
NO. 47 満州開拓青年義勇軍 ハルビン特別訓練所

日本軍は中国侵略の道具として満州国かいらい政権を作り上げ、行政権は関東軍司令部が握っていました。そして日本国内に満蒙ブームをあおりたて、土地を持たない貧農や失業青年を「満州国開拓移民団」として集団で送り込んだのです。日本人開拓団のための土地は現地住民からタダ同然で取り上げたため、土地を奪われた中国の人びとの恨みは深く、これを押さえるため、特別訓練所で中国人を武力で抑圧する訓練をしていたのです。



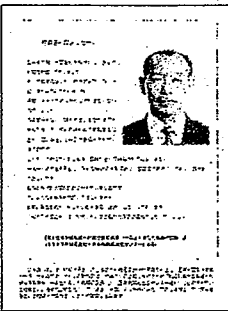
NO. 48 祖国日本への帰還

ソ連軍との間で停戦協定が締結され、ノモンハンの後片付けが終わって、正式に内地帰還が発令されました。1939年12月。いよいよ内地に向かって出発です。もう銃は返納してしまったので持っていません。心はもう、真っすぐに内地の家族のもとに飛んでいます。



NO. 49 帰国の喜び

「2年半の間、ご苦労様でした!」。出迎えの家族たちと歓談する兵士たち。1940年1月11日。召集を解除され、目黒輜重連隊の営門を出て、しゃばの人間に戻りました。2年半の軍隊生活の垢を洗い落とし、今日から民間人として再出発です。五体満足で無事に帰った喜びを、胸一杯にふくらませていましたが、これからの生活の影が、そこはかたく忍びよってくるようでした。



NO. 50 村瀬さんのメッセージ

2年半の間、中国各地を駆け巡り、多くの戦闘に参加して参りました。そして戦争の空しさ、悲惨さをひしひしと胸にきざみこんで参りました。何故、人と人が殺し合わなければならないのでしょうか。何の関係もない、婦人や子どもたちまでも含んだ住民を、何の意味もなく虐殺することが、国の為という一言で合理化されてしまうのです。しかも、これに反対する者は、国賊だとして抹殺されてしまいます。一人一人の兵士を見ると、みんな普通の人間であり、家庭では良きパパであり、良き夫であるのです。戦場の狂気が人間を野獣にかえてしまうのです。このような戦争を再び許してはなりません。戦前の軍国主義が、今じわじわと復活、浸透しようとしております。平和を守る事こそ、次の世代にたいする私たち国民の責務ではないでしょうか。

この写真パネルは、村瀬守保さんのご遺族から贈呈を受けた写真をもとに、日本中国友好協会が制作したものです。パネルの説明文は、村瀬さんの生前に発行された『私の従軍中国戦線—村瀬守保写真集（一兵士が写した戦場の記録）』（日本機関紙出版センター発行）に記述されている村瀬さんご自身の言葉を元にしてあります。写真パネル制作にあたってのご遺族ならびに関係者各位のご理解とご協力に、心から感謝申し上げます。

写真パネルの貸出について

名 称：「一兵士が写した侵略戦争—村瀬守保(1909～1988)撮影写真」

枚 数：全50枚（パネルの一部だけの貸出は行ないません）

形 態：マット紙をラミネート加工。説明文はパネルの中に印字しています。

サイズ：A 2（420mm×594mm）とB 3（364mm×515mm）の2種類。ラミネート加工のため、これまでの展示パネルに比べてコンパクトになり、送料などの負担も軽減されています。サイズは希望に応じて貸し出します。但し、貸出期間が他と重なる場合には希望に応えられない場合があります。

貸出料金：お問い合わせください。

送 料：実費負担。本部から貸出先への送付は「着払い」、貸出先から本部への返送は「元払い」を原則とします。A 2、B 3ともに1梱包。箱の大きさと重さはA 2（幅63cm×高さ46cm×奥行き4cm、約5kg）、B 3（幅56cm×高さ40cm×奥行き4cm、約3.5kg）

貸出期間：展示期間＋前後1日ずつ（搬入日などの関係で日数を要する場合は相談に応じます）

（借用申込・問い合わせは下記へ）

日本中国友好協会 TEL03-5839-2140 fax03-5839-2141 〒111-0053 台東区浅草橋5-2-3 鈴和ビル5階
E-mail: nicchu@jcfa-net.gr.jp

平和を願う 文京・戦争展

文京・真砂生まれの村瀬守保写真展



一人一人の兵士を見ると、

みんな普通の人間であり、

家庭では良きパパであり、

良き夫であるのです。

戦場の狂気が人間を野獣に

かえてしまうのです。

このような戦争を再び

許してはなりません。

村瀬守保

日本兵が撮った日中戦争

DVD上映

文京空襲

証言1 侵略戦争

語り部 小林 暢夫さん

証言2 中国人強制連行

8月10日 午後2時より

とき 8月8日(木)
13:00~18:00

ところ 文京シビック
アートサロン(展示室2)

8月9日(金)
10:00~20:00

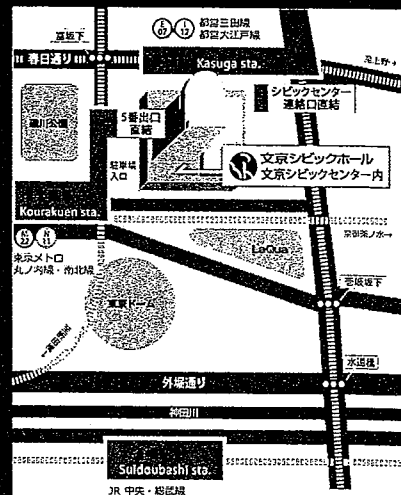
8月10日(土)
10:00~16:00

入場無料

主催 日本中国友好協会文京支部

住所:文京区本駒込5-15-12 小竹方 TEL・FAX:03-3828-2949

協賛 文京区労協/文京労連/新婦人文京支部/東京保健生協/
文京革新懇/東洋大学社研



○交通
東京メトロ後楽園駅・丸ノ内線(4・5番出口)
南北線(5番出口)徒歩1分
都営地下鉄春日駅三田線・大江戸線(文京シ
ビックセンター連絡口)徒歩1分
JR総武線水道橋駅(東口)徒歩9分

2年半にわたり中国各地で撮影し、 家族に送られた日本兵の日常



村瀬守保 (1909年~1988年) は1937年(昭和12年)7月に召集され、中国大陸を2年半にわたって転戦。カメラ2台を持ち、中隊全員の写真を撮ることで非公式の写真班として認められ、約3千枚の写真を撮影しました。

天津、北京、上海、南京、徐州、漢口、山西省、ハルピンと、中国各地を第一線部隊の後ろを追って転戦した村瀬さんの写真は、日本兵の人間的な日常を克明に記録しており、戦争の実相をリアルに伝える他に例を見ない貴重な写真となっています。

一方では、南京虐殺、「慰安所」など、けっして否定することのできない侵略の事実が映し出されています。



主な年表と村瀬守保さん略歴

- 1909年(明治42年)12月 文京区真砂町に生まれる
- 1927年(昭和2年)7月 私立豊山中学校諭旨退学
以後 人夫、新聞配達員、商店員、テキヤ、
船乗り、トラック運転手、タクシー運転手
- 1931年(昭和6年)9月 柳条湖事件(満州事変)
- 1932年(昭和7年)1月 第1次上海事変
- 1937年(昭和12年)7月 盧溝橋事件
召集 輜重兵 補充兵 二等兵
- 同年8月 第2次上海事変
- 同年12月 南京事件
- 1939年(昭和14年)8月 ノモンハン事件
- 1940年(昭和15年)1月 召集解除
- 同年3月 会社員・(株)三田鉄工所 工場長、社長
- 1945年(昭和20年)8月 敗戦
(株)三田発動機、(株)共パン、アルプスミシン(株)、
アルプス産業(株)社長
- その後
埼玉設備工業(株) 社長
全国商工団体連合会 常任理事
埼玉県商工団体連合会 副会長など歴任
- 1988年(昭和63年)7月 死去 78歳

